

### ハイドン:チェロ協奏曲 第1番

チェリストにとって今や定番中の定番だが、筆写譜が発見されたのは1961年で、翌年チェコの名チェリスト、ミロシュ・サードロにより蘇演された。作曲時期は1765～67年頃で、ハンガリーの名門貴族エステルハージ家に仕えていたハイドンが、同家に仕えていたチェリストのヨーゼフ・ヴァイグルのために書いたとされる。全3楽章からなり、リトルネロ形式などバロック音楽の名残も見られるが、両端楽章はソナタ形式で書かれており、バロックと古典派が融合したかたちになっている。ハイドンならではの優雅な旋律美を堪能できる初期の傑作である。

### サン＝サーンス:チェロ協奏曲 第1番

サン＝サーンス 37歳、1872年の作。同時期には歌劇《サムソンとデリラ》なども書かれた。3部構成だが、間断なく演奏される。ソナタ形式の第1部は、インパクトのあるオーケストラの一打で始まり、痺れるような魅力ある第1主題、緩やかに歌う第2主題が続く。第2部は愛らしい主題の短いスケルツォ。第3部では第1部の第1主題が回帰して朗々と歌い、全体の統一が図られている。

### ハイドン:チェロ協奏曲 第2番

第1番が発見されるまで、長らく本曲がハイドン唯一のチェロ協奏曲とされてきた。偽作説もあったが、1954年にハイドンの自筆譜が発見された。1783年の作で、ドヴォルザーク、シューマンの作品とともに「三大チェロ協奏曲」の一つに数えられている。全3楽章からなり、第1楽章アレグロ・モデラートは協奏風ソナタ形式。どこまでも優雅で気品ある旋律は比類ない。第2楽章は三部形式のアダージョ。抒情性の極みとも言える美しさを誇る。第3楽章はロンド形式。明るいロンド主題は生き生きとして、様々な技巧を見せつつ華麗に終わる。

### エルガー:チェロ協奏曲

エルガーの代表作の一つである本曲は、すでに国内外で作曲家としての名声を得て円熟の域に達していた1919年に完成。ただ、翌年には最愛の妻を喪い、創作意欲も減じていった。協奏曲としては珍しく、緩／急／緩／急の4楽章構成だが、第1～2楽章はアタッカで奏される。ソナタ形式の第1楽章は重厚な叙唱で始まり、この楽想が全体を支配する。続く第2楽章は急速な16分音符による無窮動的な動きが印象的なスケルツォ風楽章。濃厚なロマンティズムに溢れた第3楽章は優しい旋律のなかに一抹の寂寥が感じられる。終楽章はロンド形式をベースとして力強く変化に富み、後半には第3楽章のロマンティックな旋律、最後には第1楽章冒頭の叙唱が回顧され、全曲を閉じる。